

香川大学 大学教育基盤センターニュース

No.15 令和4年12月

*Higher Education Center
Kagawa University*

香川大学 大学教育基盤センター
〒760-8521 高松市幸町1-1
Tel 087-832-1151~1154
Fax 087-832-1155
<https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/>

目 次

1. 就任及び退任のご挨拶…………… 1
2. 第69回中国・四国地区大学教育研究会報告…………… 3
3. 創造的科目支援育成事業の報告…………… 7
4. よりよい授業のためのFDワークショップ報告…………… 12
5. 全学共通科目の授業公開報告…………… 14
6. 新スタッフからの一言…………… 16

1. 就任及び退任のご挨拶

創造教育推進部門長 三宅 岳 史



2022年10月より鶴町徳昭先生の後任として創造教育推進部門長となりました教育学部の三宅岳史です。専門は哲学や科学史ですが、2010年10月に香川大学に赴任した折から、大学教育基盤センター（当時：大学教育開発センター）には何かと携わる機会が多く、2011年4月からは共通教育コーディネーターを続けております。その間、二度にわたる中期目標・中期計画の策定などを経て、センターが大きく改変していく様を経験してきました。

長年コーディネーターをしていたこともあり、他部局・他部門からなるメンバーと調査研究部の勉強会などで現場から全学共通教育を様々な視点からアイデアを出し合い、FDや授業実践などで連携してきました。これからは創造教育推進部門長ということで、DRI教育の全学展開、とくにこれまで調査研究部勉強会や常設WGで一貫して議論してきました、デザイン教育と関連づけられている主題科目での教員・学生の双方向の学びを授業で増やすことに尽力したいと考えております。大学教育基盤センターに携わっている先生方、修学支援課のみなさま、引き続きお世話になること、こちらからお願いすることもあるかと思いますが、どうぞよろしく申し上げます。

創造工学部 教授 鶴 町 徳 昭



令和4年9月末をもちまして3年間務めさせていただきました創造教育推進部門長を退任いたしました。存在感も能力もない私でしたが、大学教育基盤センターのスタッフの皆様、修学支援課の職員の皆様のご協力のおかげで何とか任期を全うすることができました。特に小坂先生、西本先生のお助けなしには何もできませんでした。心よりお礼を申し上げます。

また、この期間の間に様々な分野の先生方と出会い、いろいろなお話をさせて頂き、その都度多くのご意見やご助言を頂いたことで、「大学」や「大学教育」について非常に勉強をさせて頂きました。もちろん各教員によって持っている大学像というものとは異なるものであり、いつでも完全な意見の一致をみるものでもありませんが、そういった対話をする事自体が、大学というものそのものが一つの運動体もしくは生命体であることを意味するのだらうと思います。今後も大学が硬直した死体にならないように、思考し対話をし続け、よりよい大学であり続けたいものです。

日本のみならず世界的に見ても大学が置かれている状況は、相変わらず厳しいもので様々な対応が迫られるわけですが、そもそも大学人がすべて満たされた状態であったことなど、歴史的に見ても一度もなかったのではないかと思います。そして大学人はいつの時代も時代とともに歩みながら、時代の流れに巻き込まれないように己の学問を突き詰め、学び続けてきたのではないかと思います。そういったことをこの任期の期間中に学んだ気がします。今後も世界を覆う反知性主義に負けずに大学人として生きていきたいと考えております。またいつか別の形で大教センターのお仕事のお手伝いが出来たらと願い、退任の挨拶とさせていただきます。3年間ありがとうございました。

2. 第 69 回 中国・四国地区大学教育研究会報告

中国・四国地区大学教育研究会が、令和 4 年 6 月 11 日に開催されました。この研究会は、大学等での教養教育を主題的に扱うもので、今年で 69 回目となります。昨年度に引き続き、オンラインでの開催となった今回は、メインテーマ「Society5.0, SDGs 等の新時代へ向けての教養教育」のもとで、基調講演及び分科会が執り行われました。以下、研究会の様子を、参加した本学教員が報告します。

■基調講演

まず国立大学協会専務理事（前滋賀大学学長）の位田隆一氏から「Society5.0 時代のリベラルアーツ教育」という講演がありました。位田氏自身のこれまでの学びの経歴や、政府が提示する将来像 Society5.0 を踏まえて、これからの大学において、専門とリベラルアーツ教育の両輪が重要である旨、お話しいただきました。続いて、ローカル SDGs 四国共同代表、鳴門教育大学名誉教授の近森憲助氏より「SDGs と ESD—大学教育における実践」という講演がありました。こちらでは、SDGs について、学生の興味関心を掻き立てるきっかけ作り、過去・現在・未来という時間軸をつかって SDGs について考えさせる工夫などが紹介されており、SDGs のみならず、現代社会の問題をテーマに授業をデザインする際の具体的な指針を頂けたように思います。質疑応答の最後で、「未来」と「リベラルアーツ」の関係をめぐる議論がありました。そこで位田氏から「なぜ様々な分野を学ぶのか。それは希望を失わないためだ。」という趣旨の発言があったことが印象的でした。非常に抽象的な話に陥っているように聞こえかねませんが、その反面、教養教育の意義を考えるうえで、深いところに触れている言葉に思えました。（文責：佐藤慶太）

■人文・社会科学分科会

多様な他者との共生・協働ができる資質・能力が不可欠な SDGs 時代において、「地域」を教育の中でどのように扱い、位置づけるのか。人文・社会科学分科会では、Society5.0 社会における教養教育の現状を認識し、対応の糸口を検討しました。第一報告の余郷裕次先生（鳴門教育大学高度学校教育実践専攻教授）からは、「SDGs 時代の教科書として「般若心経」を読む」と題して、SDGs 時代を生きるための哲学として「般若心経」の解釈が行われました。第二報告の井上奈穂先生（鳴門教育大学高度学校教育実践専攻准教授）からは、「小学校社会科における地域教材の可能性：副読本「わたしたちの暮らしと塩」の場合」と題して、副読本開発の過程で学生が地域について総合的に捉えなおす様子が紹介されました。第三報告の立岡裕士先生（鳴門教育大学高度学校教育実践専攻教授）からは、「鳴門教育大学の「阿波学」について」と題して、2000 年に設置された「阿波学」の変遷

と現状及び課題が報告されました。地域の豆知識を教えるのではなく、その地域の事例がどのように世界と結びついているのか教える。ご報告中の立岡先生のお言葉ですが、その難しさを実感した分科会でした。(文責：西本佳代)

■自然科学分科会

今回の自然科学分科会は、現代社会に存在する多様な課題を解決するために、アカデミックな内容に裏打ちされた科学的リテラシーの教育が不可欠、という認識のもと、議論が行われました。徳島大学からは、期末テストを行うことが難しい新型コロナ禍の下での新しい状況への対応も考慮した、小テストやミニレポートなどの活用に関する報告がありました。LMS や JAMBOARD といったインターネット上のツールをうまく使いつつ、レポートの採点・コメントに労力をかけている様子が示されました。徳島大学からはもう一題報告がありました。徳島大学では非常に系統的な入学時のリメディアル教育が行われています。なかでも、電気回路という具体的な科学的概念の理解についてのアチーブメントテストにおける回答の傾向から、どのような教育・実験を行うことが大切かについての考察が発表されました。教養教育院の取り組みとしてこうした教養教育の深い検討が行われていることについては、本学の体制の強化の必要を改めて感じさせられます。後半には鳴門教育大学の経験の報告がありました。まず、「トゥールミンモデル」という枠組みを用いて、学生の現象の観察自体が理論不可性を持っていることを、学生自身に自覚させる授業を行っていることが報告されました。次に、授業応答システムをウェブ上のプログラムによる CGI を用いて試作、実践している事例が報告されました。こちらはウェブアプリケーション側の技術が急速に進歩変革される中で、それに追いつきながら独自の教育システムを発展させる実践の意義と同時に、その困難性を感じさせるものでもありました。

このように、学生の自然科学的認識の発展過程を授業やリメディアル教育を通してつかもうとする多様な実践が四国でも行われていることが明らかとなりました。学生からの一つ一つの小テスト、レポート等の回答に、問題意識をもって耳を澄ますことの重要性に改めて気づかされる分科会でした。(文責：寺尾徹)

■情報教育分科会

本年度の情報教育分科会においては、Society5.0 社会の実現へ向けて、EdTech、STEAM、AI、DS 等の事例をもとに情報教育での大学の DX をテーマとしました。「香川大学の数理・データサイエンス・AI 教育に関するこれまでの取り組み」藤澤 修平先生(香川大学 大学教育基盤センター 特命講師)から、香川大学が「数理・データサイエンス・AI 教育の全国展開の推進」の特定分野校、地域ブロック代表校に選定され、数理・データサイエンス・AI 教育の普及を推進する事、「鳴門教育大学における EdTech, 数理・AI・データサイエンスに関する取り組み」阪東 哲也先生(鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教科・

総合系) 准教授)) から鳴門教育大学での情報リテラシーに関する科目の現状、今後の EdTech、数理・AI・データサイエンスを踏まえたカリキュラム構築に関する発表、「大学の情報システムにおける脅威の状況」曾根 直人先生(鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教科・総合系) 教授) から、鳴門教育大学のシステムで観測される攻撃や不正なアクティビティについての分析、大学のシステムがどのような脅威に晒されているのかが示され、より安全な情報システムに必要な課題や改善点について、等の発表がありました。上記の発表から、情報教育分野での大学の DX への取組が加速され、アフターコロナに向けての情報教育の可能性を示唆する分科会となりました。(文責:宮崎英一)

■外国語(英語)・外国語(初修) 合同分科会

初修と英語の合同で行われた外国語分科会の 1 件目の発表は、徳島大のモートン先生による「異文化理解やコミュニケーションの授業での ICT 活用について」でした。Zoom に加え、クラウドベース LMS の manaba や、動画共有サービスの loom、画面共有サービスの Padlet を利用し、異文化理解の授業やグローバルパーソン集中プログラム(GRIP) でオンライン交流を行った実践報告で、各ツール利用時のコツやエチケットについての説明がありました。

2 件目の発表は、鳴門教育大の Marchesseau 先生による「Language learning pedagogy and student feedback during the COVID 19 pandemic」でした。徳島の実物グルメサイトを利用した授業を Teams で行った際の、ネットワークや音声の品質確保や提出課題へのフィードバックの重要性について述べられました。

3 件目の発表は、鳴門教育大の木村先生による「コロナ禍におけるオンライン授業実践報告及び今後への課題」でした。Zoom と Moodle でのリアルタイムのフランス語の授業と、Google Classroom を用いたオンデマンド型の授業を並行して行われた結果、出席率がリアルタイム型の方が良好であったことなどを報告されました。

本学では Moodle、Zoom、Teams 以外を使う機会があまりありませんので、全く別のサービスの紹介は参考になりました。教室に戻りつつある外国語教育で、コロナ禍で得た ICT 利用教育の長所をどう生かすのか、改めて考える良い機会となりました。(文責:長井克己)

■保健体育分科会

保健体育分科会では、鳴門教育大学の南隆尚先生と綿引勝美先生が、それぞれ「保健体育における男女共修による性の価値観について」、「一般体育(健康スポーツ II)における ICT を活用した授業の実践(姿勢の気づきをねらいとして)」というテーマでご発表されました。南先生は体育・保健体育授業の共修経験や「男女共修」に関する意識調査の結果などに基づき、学校体育における共修授業は異性の価値観を理解する上で役立つことを説明されました。他方綿引先生は、子どもの前での立ち姿勢や机間巡視場面での姿勢等への気

づきを高める取り組みとして、スマートフォンの撮影機能を活用した授業の成果についてご発表されました。綿引先生は身体姿勢が自己の観察という難しい課題を内包しており、スマートフォン等の ICT 機器の活用が自己の身体やその姿勢への気づきを高める上で欠かせないことを説明されました。本学の健康・スポーツにおいても、今後は異なる性に対する価値観の醸成に繋がるような授業とすることが期待されました。また ICT 機器の利用により技能向上のみならず、普段の姿勢や他者対応に対する気づきを促すとする結果は、健康・スポーツの意義を更に広げるものであると考えられました。(文責：上野耕平)

■日本語・日本事情分科会

本分科会では、他者との関わり、相互理解や共生を促進するための、日本語・日本事情等の授業における取り組みが紹介され、それに基づいたディスカッションが行われました。発表タイトル及び発表者は以下の通りで、いずれも実践のご報告でした。

1 外国人留学生と日本人学生の相互交流を通じた学びの実践

元木 佳江 (四国大学 全学共通教育センター 准教授)

四宮 可苗 (四国大学 非常勤講師)

2 コロナ禍における日本人と留学生の関係構築を目指した日本語科目での実践と課題

高橋 志野 (愛媛大学 国際連携推進機構 国際教育支援センター 准教授)

3 「日本事情・日本文化」の授業における短歌導入の取り組み

廣田 知子 (鳴門教育大学 人間教育専攻 准教授)

1 と 2 はいずれも日本人学生と留学生をいかにして交流させるかという点に焦点を当てていました。コロナ禍という要因も関係しているものの、日本人学生側も留学生側も、いずれも一歩を踏み出すことに躊躇があり、それにより交流や相互理解の促進が阻害されていることがこれらの実践により明確になりました。授業における創意工夫によってこの状況を乗り越える契機を与え、一歩進んだ共修を目指していました。3 は短歌を学習後に実際に創作させ、さらに相互に評価させる意欲的な試みで、言語的な難易度等から回避されることもある内容が正面から扱われ、それにより深いレベルでの理解が促進されていました。(文責：高水徹)

3. 創造的科目支援育成事業の報告

令和4年度は、全学共通教育改革の一環として、より魅力ある意欲的な科目への創造的な挑戦を含む授業に際して、科目の実施に対する支援を行う「全学共通教育創造的科目支援育成事業」を実施しました。創造的な科目に採択された7科目の取組を報告します。

■1Q 主題科目（領域IV「生命・環境・地球」）「環境問題を科学の視点で考える」

受講生数：29名

授業担当者：山田佳裕（農学部教授）

□概要：この講義では、環境問題を題材に初年度の学生を対象にした多様な情報の収集、それらの視点の理解と客観的に自らの考えを構築する訓練を行います。初年度の学生は、学術誌以外のインターネットや書籍等の信頼性が低いソースを主たる情報源としており、学生主導の講義を行う時に必要な情報収集のスキルを養うことを目的とします。

□採択科目の創造性：理系の科目の場合は、学生主導だと、知識の質と量が劣ることが指摘されています。加えて、初年度の学生には、学術文献を基にした情報収集は難しく、知識は書籍やインターネットから得ることになります。今年度は、信頼性の高い情報にアクセスする必要性、それには多様な意見について知る必要があることを伝えることにより多くの時間を割き、また、レポートでも情報収集の手段と信頼性の解析を行ってもらい、発表後には、他者の意見への批判と自分の考えへの取り入れを行ってもらいます。

□実施内容と成果：講義は、教員の話題提供→グループ討論（1班4人）→全体討論（班毎に発表）の順で進めました。学生には、グループ討論後の考えと全体討論後の考えをレポートとして提出させました。以下の4つについて問題の背景を中心に話題提供を行いました。

- 1) テーマ「ウイルスや細菌とのかかわり方」 生命の進化の視点から考える。討論会「ウイルスや細菌とのかかわり方」。
- 2) テーマ「気候変動と化石燃料の利用」 二酸化炭素に傾注しても良いのか？討論会「気候変動対策について」。
- 3) テーマ「ヒトと野生生物の生活空間」 野生生物にどのように関われば良いのかを考える。討論会「自然保護活動のありかた」。
- 4) テーマ「治水対策と水環境」生活と環境について、市民、科学者、行政、自然愛好家の立場から考え、治水対策をテーマとしたロールプレイング。討論会「水との共存」。

□今後の課題：自分たちで考える作業が多く、他人の意見を聞けることから、学生の満足度は高かったです。一方で、教員側からみると、客観的・批判的に考えるという当初の目的には達せられませんでした。科学＝批判的な視点を繰り返し伝えましたが、これの意味するところは十分に伝わりませんでした。テーマを考えるにあたって、Webが中心になるのは仕方がないが、HP上の複数の意見をまとめるという「作業」を「考える」と捉えているようでした。目立ったのは、テーマ4の異なった立場での議論と意見の集約であるが、多くの班の結論が似ており、行政の代弁のようでした。これは、Web上で検索しやすい、声の大きい意

見に流されているといえます。これは、教科書の暗記を中心とした「学び」を行ってきた入学したての1年生に対しての講義では当然の結果かもしれません。今後の課題として、高校までの「学び」と科学的思考・批判的視点が必要になる大学の「学び」の違いを認識してもらうための、場や時間が求められると考えます。もちろん1年生に何を求めるかの議論は必要でしょう。(文責：山田佳裕)

■前期集中高度教養教育科目「DRI イノベーター養成プログラム課題研究」

受講生数：6名

授業担当者：小坂有資（大学教育基盤センター特命講師）、石塚昭彦（創造工学部准教授）、高橋亨輔（創造工学部准教授）、藤澤修平（大学教育基盤センター特命講師）

□概要：D・R・Iそれぞれの専門教員と地域課題解決プロジェクト等を実施している外部講師が担当する、フィールドワークをとりいれた DRI 教育によって教育効果を高めようとする授業です。なお本科目は、学部の枠を超えて、学生が主体的に学習する自由参加型の特別教育プログラム「香川大学ネクストプログラム」の1つである「DRI イノベーター養成プログラム」の修了演習にあたります。

□採択科目の創造性：デザイン思考をベースにしてリスクマネジメントとインフォマティクスの視点や方法を取りいれながら、フィールドワークを行い地域課題の探求と解決を試みている点です。

□実施内容と成果：9月21、22、26、27、30日に、集中講義として、「DRI イノベーター養成プログラム課題研究」を実施し、外部講師による授業を21日に行いました。ビジネスの現場で活躍されている外部講師による、グループワークを中心としたデザイン思考に関する授業でした。学生は、ビジネスの現場において現在進行形で活用されているデザイン思考を体験しながら学び、成果物を作成することができました。さらに、グループワークでの成果物を、外部講師からビジネスの現場視点で評価されたことで、学生にとってより具体的で実践的な学びの機会になりました。



外部講師による授業の様子

□今後の課題：今回は、外部講師による授業が1日のみでした。このように1日だけでなく、最終発表のプレゼンテーションの際にも外部講師が参加できるような形で招聘することができれば、より良い授業になると思います。(文責：小坂有資)

■①1Q ライフデザイン科目「地域で活躍する職業人に学ぶ A」／②1Q ライフデザイン科目「キャリアデザインと自己理解」／③2Q ライフデザイン科目「地域で活躍する職業人に学ぶ B」／④3Q ライフデザイン科目「キャリアデザインと対人関係」

受講生数：①177名、②99名、③34名、④36名

授業担当者：原瑞穂（キャリア支援センター特命准教授）

□概要：①③は、地域で活躍する職業人の講話を聴くことによって、代理体験により自己効力感を高め、イメージしたキャリアデザインを他者と共有する授業です。②は、講義を通して自身の興味や適性を考えます。キャリア理論を援用した既存のアセスメントを使用して興味関心や価値観などを探り、グループワークを通してさらに自己理解を深める授業です。④は、キャリア形成において重要な対人関係について学びます。これは社会人基礎力の一つ、「チームで働く力」にあたり、学生時代に身につけておきたい対人関係能力について考えながら身に付ける授業です。

□採択科目の創造性：①③本科目は、講師の生き方に触れることによって、キャリア形成の基盤である「生き抜く力」を考えます。また、他者と意見を共有することで価値観の違いを認め、自己の考えを深めます。入学直後に、本学で何を目指しどのように学び生活していくか、見通しを立てさせることができ、モチベーションを高めることにつながります。②本科目は、キャリア形成プロセスの1段階目の自己理解を深めます。自分で考える、他者からのフィードバック、客観的指標を使用するという段階を踏みます。8回目には、自己のキャリアデザインについて過去、現在、未来を通して語るができるようになることを目指します。入学直後の学生に、自分の将来について考える機会を与え、他者との対話によって深く自己の価値を確認し、今後の学生生活に向かう自信を向上させます。④本科目は、キャリア形成プロセスの1段階目の自己理解を他者との関わりを通して深めます。他者との関わりをワークや既存のアセスメントを通して客観的に理解します。また、自己認識を改めるためにリフレーミングを援用し、フィードバックによって自己肯定感を高めます。8回目にコミュニケーション力の向上を軸にしたキャリアデザインを語れることを目指します。

□実施内容と成果：教育効果を測るために、定量的調査として心理尺度を使用した事前事後のアンケート調査を実施しました。定性的調査として OPPA (One Page Portfolio Assessment) を使用しました。その他に②では自己イメージの一つ、興味関心の明確化のために職業興味検査 (VPI) を、④では東大式エゴグラムなどの心理テストを使用しました。OPPA の記述内容から、①では、「講義を受ける前と後ではキャリア形成に対する理解も考え方も全く異なるものになっていたのが驚きました」「講師の方の話はとても説得力があり、自分の未来を想像するのにとても役立つと思う」など、自身のキャリアビジョンの明確化に貢献できたようでした。②の受講者からは、「自分のことを卑下するのではなく、自信に満ちた心持ちで見られるようになったことが一番大きく変わったことである」「自分でも知らなかった新しい自分を知ることができ、それは確実に今後の人生を変えていくものだと考えました」など、自己理解の深まりによる自己肯定感の向上が見られました。定量的調査は現在分析中で

す。初年次の学生のキャリア意識を醸成し、自身の能力の客観視ができ、その後の学生生活を主体的デザインする機会にわずかながら貢献できたと考えています。

□今後の課題：評価項目の見直しと評価結果の学生へのフィードバック方法を工夫する必要があると考えています。（文責：原瑞穂）



「地域で活躍する職業人に学ぶB」の風景

■2Q 学問への扉（研究のみかた）「やってみる科学」

受講生数：63名

授業担当者：寺尾徹（教育学部教授）、野村美加（農学部教授）、高橋尚志（教育学部教授）、鶴町徳昭（創造工学部教授）、野々村敦子（創造工学部教授）、山中稔（創造工学部教授）、杉野本勇氣（教育学部准教授）

□概要：教室あるいは自宅学習時に自然科学や社会科学の対象に実践的に直接ふれることによって教育効果を高めようとする授業です。いろいろな学部や分野の教員が、それぞれの専門研究に近いところから、「やってみる」ことによって得られる気づきの機会を提供し、授業を通じて教室や学内外、自宅等で、科学的実験や数理解析・調査等の経験をし、そこから学んでもらう科目です。

□採択科目の創造性：実験室を用いなくても、座学の授業で工夫することにより、自然科学や社会科学の対象に研究の現場で実践的に直接ふれることができる点です。

□実施内容と成果：本授業には、教育学部・創造工学部・農学部から7名の教員が参加しました。それぞれの教員の専門を生かしながら、7つの実験を「トピック1」～「トピック7」として実施しました。実験は、1回の授業で完結するタイプのもの、2回の授業で完結するタイプに分かれています。2回の授業で完結させる場合は、ある回の授業の後半で実験の提案と注意事項の確認を行い、そのあと1週間または2週間の学生側の実践の時間をはさんで、次の回の授業の前半で解題とまとめを行います。学生は実験結果を簡単なレポートにまとめて提出します。

実験の提案は、最小限の実験内容や注意事項に加えて、発展的な内容の提示も含んでいる場合があり、自主的に発展的な内容を工夫して実施した事例も多くみられました。実験結果の動画や写真などを共有できるギャラリーをmoodle上に作成した実験もありました。

教員の熱意もあり、「学問への扉アンケート」の回答は積極的なものであり、授業の狙いは学生に伝わり、効果を持っていることを示しています。「自分の身近にあるもので簡単に実

験をすることが出来、学びを得ることが出来たのでとても面白かった。・・・普段何気なく生活している中でも自分が気づかないだけで不思議が沢山あり、そこから学びが得られるのが分かった。」「大学に入ってから最も楽しい授業でした。内容も比較的初心者向けの設定で、そしてなにより、自分で何が考えられるか、どこまで楽しんで実験できるかを常に考えられた」といった声が寄せられています。

□今後の課題：オムニバスの難しさから、「提出の仕方が先生ごとに違うため、毎回課題の処理に手間がかかった」という声は重視して次年度に生かしたいと考えています。また、人文社会学系の調査や統計解析等もテーマとして今後検討していきたいと思います。（文責：寺尾徹）



4. よりよい授業のための FD ワークショップ報告

日時：令和4年8月31日（水）～9月1日（木）

場所：香川大学幸町北キャンパス オリーブスクエア 2階多目的ホール

第13回「よりよい授業のためのFDワークショップ」が、令和4年8月31日（水）～9月1日（木）に、香川大学幸町北キャンパスのオリーブスクエア2階多目的ホールで開催されました。本ワークショップは平成22年より毎年開催されており、本学大学教育基盤センターの教員が講師を務めています。今回の参加者は、17名（香川大学16名、香川県立保健医療大学1名）でした。ワークショップは、昨年度と同様に、新型コロナウイルス感染症対策を行い、対面で実施されました。



■プログラム概要 ※GW=グループワーク

1日目（研修は8:50～17:50）

- ・オリエンテーション
- ・アイスブレイク
- ・GW I「学生の考えるよい授業」
- ・講義 I「シラバスの書き方」
- ・GW II「全学共通科目の開発 I」
- ・講義 II「学生参加型授業の技法」
- ・講義 III「よりよい学習評価のために」
- ・GW III「全学共通科目の開発 II」
- ・グループ発表 I「中間発表」

2日目（研修は8:50～15:30）

- ・ふりかえり
- ・GW IV「全学共通科目の開発 III」
- ・GW V「全学共通科目の開発 IV」
- ・グループ発表 II「最終発表」
- ・閉会式

ワークショップの目的は、授業を担当するにあたって必要となる基礎的な知識と技術を学ぶことでした。具体的には、授業の構想・設計・実施・評価に関わる一連の過程をグループ作業として体験し、参加者相互の話し合いを経てそれに関する能力を身につけることでした。

ワークショップのプログラム概要は左の通りです。一昨年および昨年度と同様に、参加者は全員パソコンを持参し、Microsoft Teams などを使いながら、全学共通科目の開発に取り組みました。各グループで、シラバス、授業計画、パワーポイント資料を作成し、発表を行いました。

初日（8月31日）では、アイスブレイクでお互いの自己紹介を通して初対面での“緊張”をほぐした後、「学生が考える良い授業」について相互に意見を出し合いグループワークを始動しました。

講義では、「シラバスの書き方」、「学生参加型の技法」および「よりよい学習評価のために」について実施され、それらを基に各グループで授業計画・シラバス作成のグループワークを行って頂きました。授業では、「お遍路」、「うどん」、「歌謡曲」、および「若者」の全学共通教育科目ならではのテーマ（今年度からの新テーマもあり）・タイトルを採り上

げ、どのように授業として進めるのか、じっくりとご議論（グループワーク）頂きました。初日ではシラバスについて中間発表頂き、講師の先生よりの確なアドバイスを頂き、2日目に反映させました。2日目（9月1日）では初日で頂戴した指摘事項も修正したシラバスのブラッシュアップ、またミニ授業に向けたグループワークを実施し、午後より授業発表を頂き相互のチームでじっくり討議する事で授業内容での良い点、悪い点を議論していきました。このように今回のワークショップでも、遠隔授業の技術やツールについても学ぶことができ、それらを全学共通科目の開発に取り入れることができ、非常に実りあるワークショップになれたと思います。

大学教育基盤センターの教員の方々と、修学支援課の職員の方々のご協力のおかげで（感染対策も万全の中で）、今年度も無事に、充実したワークショップを開催することができました。関係各位の皆様改めて深く御礼申し上げます。有難うございました。

（文責：松本洋明）



5. 全学共通科目の授業公開

令和4年度、全学共通科目では5月～11月に以下5科目で授業公開を実施しました。

- 授業科目名：ライフデザイン「映像から学ぶ香川の歴史と文化、地域の課題」
- 日 時：令和4年5月27日（金）2コマ
- 場 所：421 講義室（幸町北キャンパス4号館2階）
- 担当教員：岡田 徹太郎（経済学部）、西本 佳代（大学教育基盤センター）
- 内 容：
映像資料「高松市の公共交通政策」を題材とするレポート発表、グループワーク、プレゼンテーション
- 履修者数：25名

- 授業科目名：大学入門ゼミ J（4）「法の運用現場を学ぶ」
- 日 時：令和4年6月28日（火）3コマ
- 場 所：第2 講義室（幸町南キャンパス3号館1階）
- 担当教員：平野 美紀（法学部）
- 内 容：
翌週のフィールドワーク(家庭裁判所見学)に向けたグループごとのプレゼンテーション
- 履修者数：19名

- 授業科目名：高度教養教育科目「DRI イノベーター養成プログラム課題研究」
- 日 時：令和4年9月30日（金）4コマ
- 場 所：香川大学図書館中央館2階ラーニングコモンズ（幸町北キャンパス）
- 担当教員：小坂 有資（大学教育基盤センター）、石塚 昭彦（創造工学部）、高橋 亨輔（同）、藤澤 修平（大学教育基盤センター）
- 内 容：
DRI を活用した高松市における地域課題の発見と解決に関するグループ発表（ネクストプログラム「DRI イノベーター養成プログラム」の修了演習）
- 履修者数：6名

- 授業科目名：学問への扉「SDGs 学入門」
- 日 時：令和4年10月13日（木）5コマ
- 場 所：314 講義室（幸町北キャンパス4号館2階）
- 担当教員：寺尾 徹（教育学部）

■内 容：

地球と生物の側から持続可能性について考える

■履修者数：32名

■授業科目名：学問基礎科目 歴史学 B「歴史的事実の成り立ちかた」

■日 時：令和4年11月17日（木）4コマ

■場 所：621 講義室（幸町北キャンパス 6 号館 2 階）

■担当教員：守田 逸人（教育学部）

■内 容：

陵墓問題と天皇制

■履修者数：103名

6. 新スタッフから一言

修学支援課 木村珠雪

令和4年7月1日付けで、新規採用され教育・学生支援部修学支援課に配属されました木村珠雪と申します。

6月までは、他業種にて現場を走り回る毎日を送っておりました。未経験での事務職となり、右も左も分からず失敗の繰り返しですが、修学支援課にて大学業務の全般を広く経験できることをありがたく感じております。

皆様には、多々ご迷惑をおかけするかと存じますが、一日も早く業務に慣れるよう努力してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしく願いいたします。



原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援課）までお願いします。